

2021. 10. 17. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書1章16～20節
『招きに応える』

こういう声をたまに聞くことがあります。「本当のものに出会いたい。本当のものに招かれない。」と……。確かにその通りなのです。

しかし、本当のものに出会ったり、招かれないと思う余りに、あれも違うこれも違うなどと退けていると、いつのまにか自分の好き嫌いでしか生きられなくなってしまいます。不自由な生き方と言わざるを得ません。

もしも本当のものに出会ったり、招かれないと願うならば、それは間違いなく、そうでないと思えたりするような、間に合わせのものでも引き受けて生きるところにあるのではないのでしょうか。おそらく本当の出会いや招きは好き嫌いなどという自分の内側にはないのでしょうか。そうでないものに比べ続けることの中にこそ本当の出会いや招きに答えるということなのでしょう。

本日の聖書の箇所には四人の漁師が登場します。彼らはある日突然に「わたしについて来なさい。」という招きにあいます。

イエスは「すぐに」(20節)彼らと呼ばれ、彼らは「すぐに」(18節)イエスに従ったといえます。「網を捨てて」(18節)と「舟に残して」(20節)とは、それまでの生活や関係を離れてということ以上に、イエスの招きに即答する彼らの姿を鮮明に描き出します。

おそらく多くの者に声を掛けられて招かれたとは思いますが、従ったのはこの四人だけであったということなのでしょう。

マルコはどのようにして福音書の第1章から早くも弟子たちの姿を描き始めたのでしょうか。なぜそこいらの人を招くのではなく、せつかく弟子たちを招くのであれば、ちゃんと準備された知識や経験のある人格者を招かなかったのでしょうか。自他共に認める専門家や信仰者は掃いて捨てるほどいたはずなのです。

続く1～2章の小標題だけ見ても、イエスが初めから日常的に出会う人々は「汚れた霊に取り憑かれた男」「多くの病人」「らい病を患っている人」「中風の人」「徴税人」などなのです。それは当時の社会から「あなたは必要ない」と蔑みのレッテルを貼られた人々でした。そしてこれが初代教会が関わりを持った人々であり、初代教会そのものだったし、何よりもイエスの招きということなので

す。

これらのことから分かるように、「イエスの出来事への招き」というのは「条件」がないということ、そしてもし「条件」があるとするならば、それは彼や彼女がイエスの招きに「すぐに」応じることが出来たかどうかという一点だけなのです。

もう一つの側面は、イエスの宣教がごく最初から弟子たちと共に行われたということです。それは宣教が、教祖的カリスマやリーダーシップに負うことなく、協議という過程を経て練り上げられて行ったということに出発点を持つということなのです。

宣教とは、イエスの十字架と復活に招かれているという深い認識の下に、それぞれが遣わされた場において、すでに贖われている存在としての責任を持つということです。つまり、宣教への招きとは、徹底して「あなたが必要です」というひっぱりや後押しをあなたの現実の中に見出しなさいという神の側からの宣言なのです。

なぜならば、人は「招きに応える」存在として創られたからなのです。